

続

徒然
つれづれ

不謹慎発言を大反省

桑野 巍

世の中の潮流変化、テンポの速さを感じる。漂流しないように心懸けているが「気楽に時の流れにつき合うほかない」とも思う。そんな時、ふと30数年前を思い出した。大阪府立大学教授だった音田正己先生（故人）が立ち上げた勉強会のことだ。この会は原則として毎週水曜の夜開かれる。入会したころ原子力発電の話聞いた。講師はメンバーの一人で関西電力の幹部氏。テーマは「原子力発電所は安全で安価」だった。

彼はオーストリアのウィーンで原子力発電の勉強に励んだ。帰国直後でホットな情報を提供してくれた。難しい言葉もあったが要は原子力は安定供給できるし、安価で安全だという。当時石油危機の後遺症で火力発電の燃料費が高騰したこと、排出ガスによる環境悪化で電力業界は脱石油を迫られており、原子力発電に舵を切ったのだ。

ここまでは理解できたのだが、原発のメカニズムは複雑で、図を書いてももらっても理解不能だった。自分は10万トン級の鋼鉄船がなぜ海に浮かび走るのかも分からないのだから無理もないと恥じ入った。それでもと思って場違いの質問を試みた。「原発は安全というが、共産圏から大砲やミサイルを撃ち込んできて防衛できるのか」と質問したら彼は顔を歪め、不機嫌そうな表情だったのを覚えている。

「あんた何を言いたいのか。破壊的な質問や意見はやめてほしい」と彼は怒り声だった。そのあと彼は「だから僕らは新聞記者は嫌いなんだよ」とつき離しにかかった。彼の頭の中はよく見通せないが「真面目に建設的に発言したらどうか」との態度が見えた。本当は地震や炎暑、極寒でも大丈夫なのか、と聞いておけばよかったのにと猛反省した。

もう一つは30年ほど前の神戸勤務時代の出来事だ。このころの神戸市役所の職員たちは夕刻の個々の懇談会（飲み会）の場では「われわれ社員は…」と胸を張っていた。地方公務員ではなく、企業のモーレ

ツ社員を意識していた。そんな時代だった。そのころ、神戸市の宮崎辰雄市長ら幹部と報道関係責任者の懇談会があった。席上ほんの少しのアルコールが入った。私は「雑談ですが」と前置きして「神戸への観光客が減っているそうですが何か策はありますかネ。ポートアイランドに建っている超高層ビルがもしかしてピサの斜塔のようになれば、観光客が年間300万人は増えると思いますが…。まさか地震はないでしょうけれど」と発言した。悪意はなかったが、ひやかし発言に市長は聞き耳を立てた。

真面目な老市長はその場にいた秘書課長を呼び「おい、すぐに土木局長に連絡して聞いてみる」と命じた。10分ぐらい経過して局長から連絡が入り、秘書課長がそれを説明した。「先程のお話ですがポーアイに建ててある超高層ビルは大阪湾の地下の岩盤に基礎杭をしっかりと打ちつけていますので、大地震でも大丈夫だということです。心配ありません」ということだった。

懇親の場が一時的ではあれ白けたのだが、土木局長のお墨つきで座がぱっと明るくなった。市長は私の方を向いて「よかったよかった。あまり脅かさないうで下さいよ」と言いながらグラスを傾けていた。そのあとはユニバーシアード神戸大会の話題、六甲アイランドの埋め立て状況などを聞き懇親会は盛り上がり有意義だった。

記者時代の失言は若気のいたり、身から出たサビで大きな反省材料だ。本誌上でも不謹慎発言が目立ち大いに反省している。長い間「つれづれ」欄を担当させていただいたが事情により本稿で終了、関係の皆さんに感謝します。ありがとうございました。「天に春 地に冬けわし自治の道」と言われますが、この先の皆様のご活躍をお祈りしペンを置きます。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）